

中学校英語科における「深い学び」の解釈とその実践 －国際バカロレアの主要概念を用いて－

Interpretation and Practice of "Authentic Learning" in Junior High School English Classes: Using Key Concepts of the International Baccalaureate

堂本佳樹* 鳴海智之**
DOMOTO Yoshiki NARUMI Tomoyuki

本稿は、2020年度から全面施行された新学習指導要領でうたわれている、「主体的・対話的で深い学び」について、筆頭著者が中学校英語科の指導・支援の中で、どのように具現化を試みたかを示したものである。特に「深い学び」の指導・支援について検討する際に参考にしたのが、国際バカロレア教育が推進している「概念教育」である。ここで示されている項目を踏まえて、単元構想や授業計画に「概念教育」の考え方を取り入れたことで、従来の授業と比較して、授業内で行う表現活動の内容や、生徒の表現内容・学びに変化が見られた。本稿のまとめとして、中学校英語科での「深い学び」を通して、他の学習や文脈で活かせる汎用的な資質能力を生徒につけさせることの利点や課題を示す。

キーワード：深い学び，中学校英語科，国際バカロレア，主要概念，コミュニケーション

Key words : authentic learning, junior high school English classes, the International Baccalaureate, key concepts, communication

1 はじめに

「学習指導要領改訂の考え方」（文部科学省，2019a）において、以下の3点が提唱されている。

- ・新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実（何ができるようになるか）
- ・新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し（何を学ぶか）
- ・主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習過程の改善）（どのように学ぶか）

上記3つの観点の中で、本稿では特に「主体的・対話的で深い学び」の中の「深い学び」について、中学校英語科の単元構想・授業計画においてどのように実現するか検討を行う。

「新学習指導要領の全面实施と学習評価の改善について」（文部科学省，2019b）では、『習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。』とある。

本稿では、中学校英語科における「習得・活用」の学びについては、既習の文型や文法事項、語彙や表現の習得を促し、それらを活用して表現活動を行うこととした。一方で、「探究」の学びについては、国際バカロレア教育における「概念教育」の主要概念の一つにある「コミュニケーション」（詳細は後述）を取り上げて、表現活動の内容を検討することとした。

2 国際バカロレア教育と「深い学び」の関係性

2-1 国際バカロレア教育における概念教育

国際バカロレア（IB）は、スイスに本部をおく「国際バカロレア機構」が提供する、国際的な教育プログラムである。もともとは、世界中を転動する家庭の子どもが大学に進学できるように、国際的に認められる大学入学資格を作ろうという動きから生まれた。具体的には「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」を目的としている。

日本政府は、IBの目指す理念や教育カリキュラムは、日本の新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」と親和性があるとして、令和4年度までにIB認定校を200校以上とする目標を掲げている（文部科学省IB推進コンソーシアム，2023）。

日本の中学生の年代を対象にしたIB教育のプログラムはMiddle Years Programme（MYP）が該当する。11歳～16歳までが対象で、青少年にこれまでの学習と社会のつながりを学ばせるプログラムになっている（文部科学省IB推進コンソーシアム，n.d.）。また、その中で掲げられている「概念教育」の「概念」について、例えば、江西国際学園のウェブサイト（n.d.）では、『概念は、特定の分野内および主題分野全体に関連性のある大きなアイデアです。MYPの学生は、概念を手段として使用して、個人的、ローカル、およびグローバルな重要性の問題やアイデアを調査し、知識を全体的に調べます。MYPは、16の主要な学際的概念と、各分野に関連する概念を規定しています。』と説明されている。

* 兵庫県三田市立けやき台中学校

令和5年7月12日受理

** 兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻言語系教科マネジメントコース 講師

MYPで学ぶ科目は日本の1条校のそれとは少し異なっており、以下の科目である。括弧に記したのは1条校の科目にあたる。

- ・言語と文学（国語）
- ・言語の習得（外国語・英語）
- ・個人と社会（社会）
- ・理科（理科）
- ・数学（数学）
- ・芸術（音楽・美術）
- ・保健体育（保健体育）
- ・デザイン（技術・家庭）

これらの科目で共通して学ばなければならないのが「主要概念」である。表1はIBが提示している16のそれである。

美しさ	変化	コミュニケーション	コミュニティー
つながり	創造性	文化	発展
形式	グローバルな相互作用	アイデンティティー	論理
ものの見方	関係性	システム	時間、場所、空間

表1 IBにおける主要概念

2-2 先行実践

IB認定校である札幌開成中等教育学校の「言語習得（英語）1年」の実践では、表2のように年間指導計画が立てられている。

	Unit Title	Statement of Inquiry
1	Nice to meet you	コミュニケーションは文化に影響を受け、相手に対する配慮を必要とする。
2	My Day	様々な文化の人々と日常生活について伝え合うことを通して、文化と日常生活のつながりに気づき、自分のアイデンティティについてより深く、また客観的に理解できる。
3	My town	あなたの町を多様なオーディエンスに宣伝することは自分の町の見方を広げ、他者の地元へ対する尊重を深める。
4	My story	過去・現在・未来を結びつけることは、自分自身への理解を深め、今後の展望を考えることにつながる。

表2 札幌開成中等教育学校 言語習得（英語）1年

Statement of Inquiryとは探究課題であり、その単元の学習を通して、生徒たちに身につけさせたい主要概念を

探究テーマとして提示している。

例えば3My townでは、主要概念を「ものの見方」と設定している。この概念の定義は、国際バカロレア機構(2018)によると、『状況、物、事実、考え、意見を観察するときの立ち位置です。それぞれ個人や集団、文化、学問領域と関連づけられることがあります。多様な「ものの見方」がしばしば、複数の表現や解釈となって現れます。』である。

また、課題設定において、「札幌を訪れる方に、自分の暮らす街札幌の魅力を紹介するパンフレットを作成することを課題として設定し、生徒の興味・関心を高める工夫をした。その際、観光客の情報(出身地域・年齢層・特徴や性格・季節)を自分で設定し、受け手を配慮したパンフレット作成を試みた。」としている。観光客の情報を自分たちで設定すること、特に季節を入れることによって、場所が札幌であるため、季節を冬に設定すると雪まつりの情報が入ることが推察される。

このように、生徒たちに身につけさせたい主要概念を設定し、指導者が課題設定においてそれを意識することによって、「探究」の学びが実現され、生徒たちの「深い学び」につながっていくものと考えられる。

3 本実践

本実践は筆頭著者が令和4年度の1月に、兵庫教育大学附属中学校で中学校1年生を対象に行ったものである。兵庫教育大学附属中学校は令和4年度、IB認定校となるべく、総合的な学習の時間に探究活動を取り入れ、各教科指導においてはIBの「概念教育」を取り入れて単元構想・授業計画を行った。

使用教材は、NEW CROWN 1（三省堂）のProject 2「英語のタウンガイドを作ろう」である。生徒たちは1学期に自分のこと、自分のできることを、転入生のことについて紹介・表現する方法を学び、2学期には自分の家族や町のこと、アメリカの学校生活、友達が日本を旅行した時のことを紹介・表現する方法を学習している。

3-1 本実践における「主体的・対話的で深い学び」の解釈

本実践では、主題を『「英語のタウンガイドを作ろう」～自分の町のおすすめスポット紹介』と設定し、「自分の町のおすすめスポット」を、生徒たちが既習事項を使い、未習事項は自分で調べて、兵庫教育大学の留学生に紹介することとした。学習内容を生徒たちの身近なことに結び付けることで、学習に取り組みやすくすることや、発表する相手を意識することで、どうわかりやすく伝えていこうとするか、その内容をどうするかを考えさせることで、生徒たちが「主体的」に取り組めるように課題設定を行った。

「対話的」においては、生徒が活動に取り組む中で、生徒同士で互いの進捗状況や、どんな情報を伝えていくかなど自由に話し合いながら活動に取り組ませるようにした。また、情報の内容の整理や、生徒が知らない表現を知っている表現に置き換える支援を筆頭著者が

行った。加えて、新学習指導要領の解説において、対話的な学びの中に「先哲の考え方」という文言があるが、それを教科書に例示されているモデル文であると解釈した。中学生が外国語（英語）で、自分たちの町のおすすめスポットを紹介するという作業は、とてもハードルが高く、負荷のかかる活動である。そのため、例文やモデルがあれば、それらを参考にして、自分たちの情報を整理できることから、それらに基づいて活動を支援していった。このように、他の生徒や指導者、教科書のモデル文と「対話的」に表現内容を作成していった。さらに、発表対象を兵庫教育大学の留学生とし、留学生に実際に授業に参加してもらい、生徒たちの発表を聞いてもらった。新学習指導要領の解説では、「対話的」の対象には「地域の方」も含まれていることから、留学生も「地域の方」にあたると解釈した。

「深い学び」については、IBにおける「主要概念」の中の、「コミュニケーション」を深い学びの手段として取り上げた。この概念の定義は、国際バカロレア機構(2018)によると、『メッセージ、事実、アイデア、記号などのやりとりや伝達です。送り手、メッセージ、所定の受け取り手が必要です。情報や意味を伝達する活動が「コミュニケーション」にあたります。効果的な「コミュニケーション」には、共通の「言語」（文語、口語、言葉によらないものも含む）が必要です。』である。本実践においては、送り手（生徒）が特定の受け手（兵庫教育大学の留学生）に自分の町のおすすめスポットの情報を書いたり、スライドを使いながら話したりする活動であると解釈できる。しかし、このような活動は一般的に行われているため、本実践での「深い学び」としては、生徒たちが、受け手が兵庫教育大学の留学生であることを意識し、受け手のニーズに合わせて、伝達する情報内容を考えることに設定した。

3-2 本実践の概要

3-2-1 教科書の場面設定

教科書のリード文は以下のように記されている。

「学校の英語版ウェブサイトで、自分の町の魅力を発信することになりました。おすすめの場所を調べてタウンガイドを作ろう。」

このリード文によると、自分のおすすめの場所の情報を、学校の英語版ウェブサイトに載せることになっているが、発信相手が誰であるかは明示されていない。おそらくウェブサイト閲覧する不特定多数の人がその情報の受け手になると考えられる。活動の中には、「何のために」、「何について」、「何をするか」の情報を整理する学習過程は経ているものの、情報の受け手が明示されていないため、教科書の狙いだけでは、既習事項を活用して、タウンガイドを作ることのみが目標となっているといえる。

3-2-2 本実践の場面設定

本実践は前述のように、令和4年度の兵庫教育大学附属中学校で取り組んだものである。生徒たちは兵庫教育大学附属小学校からの進学者が多い一方で、地域公立小

学校からの進学者もいる。したがって生徒たちが居住している場所は様々であるので、同じ地域からの通学生をグループにするよりも、個人での作業にする方が活動しやすいと考えた。また大学の附属学校である利点を活かすべく、情報発信相手を兵庫教育大学に通う留学生に設定し、相手を意識することを「深い学び」のめあてに設定した。従来であれば教科書の活動にあるように、何のために情報を発信するのか、何について情報を整理するのか、そこで何ができるのかについて指導者が指導しておけば十分であった。しかし、本実践において「深い学び」を実現するためには、生徒たちに情報発信相手を意識させることを通して、相手のニーズを考えることが重要であることに気付かせ、生徒たちがタウンガイドの内容をより充実させられるようにする必要があると考えた。

3-2-3 本実践の単元のめあて

教科書の学習をベースにして、上記のように指導者がIB教育における概念教育の「主要概念」を意識することで、単元のめあてが教科書のそれと少し異なる物になった。

- ①既習事項を活用し、未習事項はその語彙を調べて、自分の町のおすすめの場所をわかりやすく発信することができる。
- ②発信相手を意識して留学生にわかりやすく情報を発信することができる。

教科書のリード文は「おすすめの場所を調べてタウンガイドを作ろう」であり、そのめあては、「おすすめの場所を調べること」、「調べたことを、既習事項を使って英文で作成すること」であった。しかし概念教育の内容を踏まえると、相手の状況を理解した上で、相手の立場に立って情報を追加していくが必要になる。これについては英語学習のみならず、他の教科や総合的な学習の時間などの発表活動においても、中学生は自分の学んだことや調べた情報を整理して発表することはできるが、聞き手や読み手の背景を知ろうとして情報を発信することが出来る生徒はほとんど見られないのが現状である。

3-2-4 単元計画

教科書の指導書では2時間の配当になっているが、本

第1次	教科書モデル文の理解 タウンガイドの役割について
第2次	教科書モデル文の復習 自分たちの町のおすすめスポット考察①
第3次	自分たちの町のおすすめスポット考察②
第4次	自分のまちのおすすめスポット英作文①、 発表用スライド作成①
第5次	自分のまちのおすすめスポット英作文②、 発表用スライド作成② 発表練習
第6次	留学生へおすすめスポットを発表

表3 「タウンガイドを作ろう」単元指導計画

実践では、概念教育の要素を取り入れ、また留学生への発表も含めたため6時間の計画をした。

本実践では前述の「コミュニケーション」の主要概念に迫るべく、まず生徒たちにタウンガイドの機能・役割について考えさせた。なぜタウンガイドが必要なのか、誰を対象にするのか、どんなタウンガイドが読者にとって見やすいのか、タウンガイドは紙のパンフレットかインターネット上のページか、文字情報だけなのか、音声も入れるのかなど、IBの概念教育を取り入れたことで、従来はあまり指導できていなかった内容を本実践で扱うことができた。

また、筆頭著者は従来、表現活動において生徒たちの母語（生活語）、すなわち日本語で情報内容を考えさせることに重きを置いていた。それは今後学習が進むにつれて、生徒たちが自分の意見や考えを英語で表現する際に、その意見や考えはまず日本語で発想するので、日本語をベースに表現活動を進めていくのが、生徒たちにとって取り組みやすく、授業を進める上で現実的であると考えたためである。この考え方を筆頭著者は「英作文用日本語」と呼び、賛否両論あるが、いずれにせよ、課題に対して英語で表現するゴールは同じであり、そのゴールに向かう過程の問題であるので、今回の実践では生徒に「英作文用日本語」で考えさせることをねらいとした。

4 生徒Aの学習

本実践の対象は中学校1年生104名であったが、本稿では、研究発表の承諾を得た生徒の内の1人、生徒Aの学習について記述する。この生徒を取り上げた理由は以下の通りである。

- ・真面目で素直に課題に取り組み、学力は中位程度である。
- ・課題に対しての創意工夫の観点が限定的である。
- ・適切な助言を受けたら、自身の考え方や発想の視点を広げることができ、表現内容が単元のめあてに迫っていける見込みのある生徒である。

以上のことから生徒Aの取り組みについて記述する。

4-1 単元ふりかえりシート

本実践では、OPPAシート（堀, 2019）を参考に、「思考の見える化」を試み、生徒たちが、各回の授業で自分がどんなことを考え、学んだかを振り返らせて記述させた。OPPAシートを参考にした理由は、その記述が生徒にとって過度な負担にならないことと、見開き1ページで自分の思考の流れと、学習進捗状況が分かりやすく視覚化ようになっているからである。1ページを6分割して、各時間の振り返りと課題の英作文を記述させた。

4-2 生徒Aの「学び」

4-2-1 「英作文用日本語」での思考

第1次は本文内容理解とタウンガイドの機能を学習した。英語でタウンガイドを作る作業は第2次から始めたが、図1～3を見ると、第2次から第4次にかけて、少しずつ「英作文用日本語」が単純になっており、英作

図1 生徒Aふりかえりシート②

図2 生徒Aふりかえりシート③

文を行うために、「何のために」、「何について」、「何をするか」に関する情報が生徒の中で徐々に整理されてきていることが読み取れる。

このような表現活動に取り組む際には、生徒が簡単な日本語で考えられることが重要になるが、生徒A自身は図2でそのことに気付いていることが分かる。中学校1年生の段階で表現できるのは単文であるため、その文型にあてはまる「英作文用日本語」で表現内容を考えることが重要になる。筆頭著者の経験上、このような表現活動を行うとき、生徒たちは自分たちの思いついた日本語をそのまま英語に直そうとする。生徒Aは、「簡単な日本語で考える」と気づき、図3では「あなたたちは/できる/釣りを/池で」と「英作文用日本語」にあてはめてはいるが、図4の5行目では“Other you can fishing

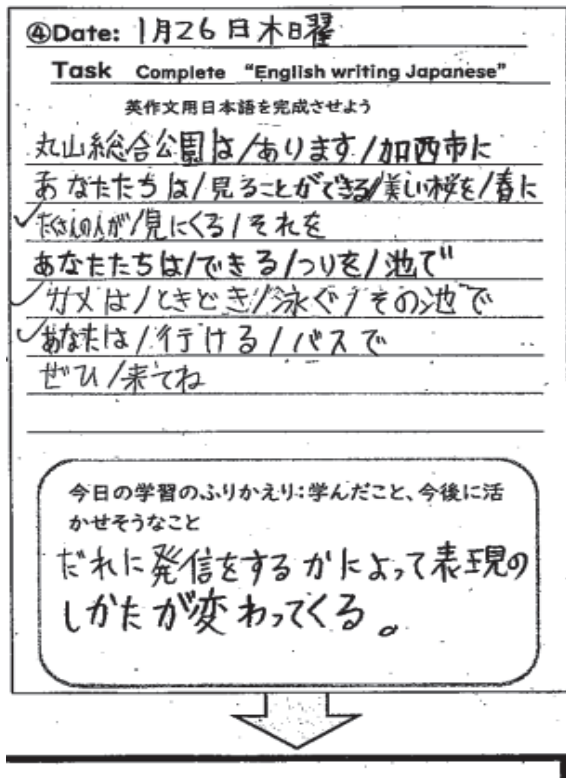


図3 生徒Aふりかえりシート④

in the pond.”とした。おそらく英文に直すときに「他には」という言葉を思い付き、それを入れたのであろう。また「できる」を動詞として考え、英文での一般動詞を入れていない。「釣りができる」を「できる」「釣りを」と考えたと思われる。三森(2003)は、外国語を学ぶときに、言語感覚の違いが大事であるとしている。そして日本語と外国語の橋渡しをする言語の獲得が必要であるとも主張している。三森はそれを「中間日本語」と呼んでいるが、生徒Aにもこの主張があてはまる。「できる」「釣りを」と「英作文用日本語」で考えられたことは、生徒Aにとって良い学習になったと思われるが、「釣りができる」を「釣りをすることができる」と考える「中間日本語」が必要であった。この日本語と外国語の橋渡しをする「中間日本語」や、「英作文用日本語」で考えることが、主要概念「コミュニケーション」の中の要素

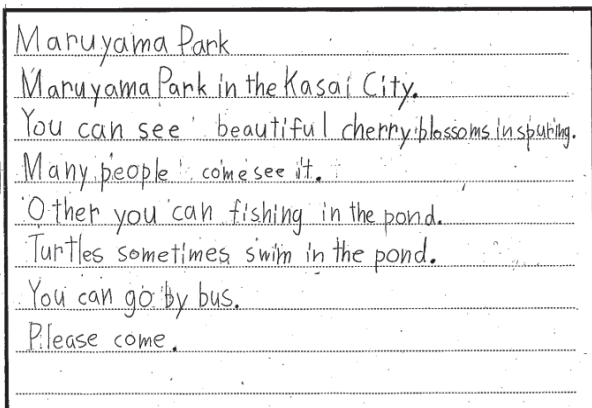


図4 生徒Aのおすすめスポット英文

であると考えられる。外国語でコミュニケーションを図る上で、日本語を外国語で表現するには、何らかの工夫が必要であることを概念として理解する必要がある。

4-2-2 主要概念「コミュニケーション」について

図4は最終的に生徒Aが作成した「自分のまちのおすすめスポット」の英作文である。前述の通り、本実践は、送り手(生徒)が特定の受け手(兵庫教育大学の留学生)のニーズを考えた上で、自分のまちのおすすめスポットの情報を書いたり、スライドを使いながら話したりする活動であったが、生徒Aの英作文では“You can go by bus. Please come.”くらいしか相手を意識した情報が含まれていなかった。振り返りシートを返却する際に生徒Aに尋ねると、本人は「他の情報も入れたかったけど、量が多くなるのと時間が足らなかった」ために相手を意識した情報を入れられなかったとのことであった。指導者としては、留学生が住んでいる場所から、生徒Aのおすすめスポットまで、どれくらい時間がかかるか、バス代はおおよそいくらかかるかなどのような情報が含まれることを意図していた。所要時間やバス代などの情報を入れた生徒も数名はいたが、本実践でねらっていた、特定の受け手を意識することで、伝達する情報内容を考える「深い学び」が英作文の内容に反映されなかった生徒も少なからず見られた。図5の生徒Aによる単元のふりかえりを見ると、今回の実践で意図したことは生徒Aなりに理解しているようであるが、それをどのように他の文脈で活かすことができるかについての記述が見られず、本実践のねらいを生徒たちに十分に伝えられていなかったことが明らかになった。

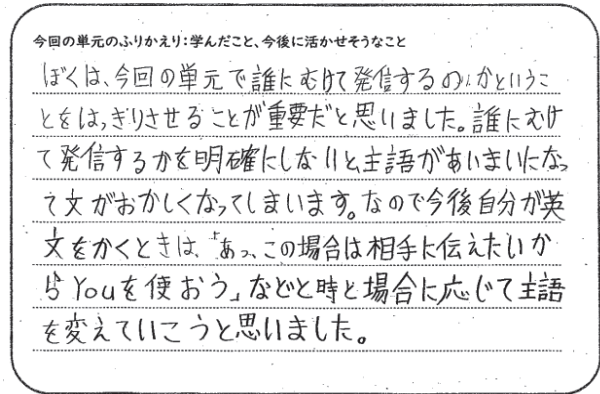


図5 生徒Aによる単元のふりかえり

5 考察

前述の札幌開成中等教育学校の先行実践では、「主体的な学び」として、生徒の暮らす町である札幌の魅力を紹介するパンフレットを作成することで、身近な話題をとりあげ、生徒の興味関心を高めようとしていた。そして3~4人のグループでそれぞれが、自然や食事などのテーマを決めてプランを作り、最終的に協力して生み出したアイデアを参考に、札幌のパンフレットを仕上げるといったものであった。また、IB教育における概念教育の「主要概念」を「ものの見方」に設定し、

探究の問いを「人々が旅行する理由」、「地元の人と同じ感覚で場所を経験するか」という「旅行者目線」で行い、生徒たちに自分たちの町をメタ的に認知するような問いがなされていた。

本実践では「主体的な学び」は先行実践と同じ形であったが、「対話的な学び」はグループではなく個人の取り組みとした。そして個人で作業を進める中で、分からないことや情報の内容について、仲間や指導者に質問しながら対話的に進めていくというものであった。「深い学び」については、IB教育における概念教育の「主要概念」を「コミュニケーション」に設定し、特定の発信相手の状況を慮ることを主眼においた。発信相手の状況を考えることで、情報の内容や、使用する語彙・表現が変わることを意図していた。また、母語で考え、それを既習事項の文型にあてはめるような「英作文用日本語」で発想する力も、表現学習を進めていく上で重要であると考えた。

本単元における情報発信相手は兵庫教育大学の留学生であった。生徒たちはプレゼンテーションの締めくくりを“Please visit.”などのようにしており、留学生たちが、どこに住んでいるのか、車を持っているのか、移動手段は何であるかなど、相手の状況を考えられていない生徒が見られた。自分の言いたいことを英文にするのに労力がかかり、情報発信相手の状況を顧みる余裕が無さそうであった。自分たちの情報発信を効果的なものにするためには、情報発信相手を自分たちの文脈に導くような導入的な情報や、相手と共通の話題に乗れるような解説が必要になると言える。この視点が他の文脈でも活かされる考え方であり、今回本実践で初めて試みることができたことである。

6 まとめ

令和4年度の兵庫教育大学附属中学校の研究テーマが、「学びの転移」であったため、本実践は、学校全体として学びを転移させる手段として、IB教育の概念教育を取り入れて学習を進めていく取り組みの一環でもあった。本実践のまとめとして、IB教育における概念教育の「主要概念」を中学校英語科の単元構想や授業計画に取り入れたことで見えてきたことについて論じる。

6-1 主要概念と「深い学び」の関係性

今回の実践では、主要概念を「コミュニケーション」に設定したが、指導者が単元構想や授業計画の中で、生徒たちにどんな力をつけさせたいかによって、選択する主要概念の項目は変わってくる。仮に指導者がこの単元で「タウンガイドの見栄えの良さ」を主題に生徒たちに取り組みせたいのであれば、表1にある主要概念の中で「美しさ」を選択することになる。既習事項を使って言語の学習を行う一方で、例えば文化祭で掲示することも主眼においた活動にするなら、タウンガイドをどう美しく作ればよいかをテーマとして取り組みさせることも指導・支援のポイントになる。美しさを追求するのは美術科だけに限ったことではなく、見た目の美しさも大

事なポイントになってくる。英文と視覚情報を見やすくレイアウトすることも、英語科に限らず様々な教科の活動において、成果物を提示する際に必要な能力であり、他の文脈でも活かされる汎用的な力につながると考えられる。活動を通して生徒に主要概念に基づく力をつけていくことが、「深い学び」の指導・支援につながるものであると実践を通して明らかになった。

6-2 本実践の成果と課題

本実践の成果としては、単元構想や授業計画の中に、IB教育における概念教育の「主要概念」の「コミュニケーション」を取り入れ、情報の受け手を意識して表現活動を行うことを主眼として授業に取り組んだことを通して、筆頭著者の指導者としての教材理解の視野や、生徒への支援の幅が広がったことである。従来の生徒への支援は、情報を伝えるために既習事項をどのように用いることができるか、「英作文用日本語」を通して考えさせるような方法がほとんどであったが、今回の実践で、情報の受け手がどのような状況にあるかを想像させることを通して、情報内容の変更や充実を生徒に促す必要があるということが分かった。生徒Aには十分にそのことを指導しきれなかった部分はあるが、このような指導を通して、生徒が今後他の教科で発表活動を行う際、ひいては将来他者に情報を説明する際に、情報の受け手のことを考えて話すことができるようになることが期待される。このような力が他の文脈でも活かされる汎用的な力であると考えられる。

課題としては、英語での表現活動をしながら、「主要概念」に基づいた力をつけていくことは、生徒にとっても、指導者にとっても負荷がかかったことである。生徒たちはまず、「英作文用日本語」で、自分たちの知っている文型に自分の言いたいことをあてはめる作業を行ったが、その活動を進めていくだけでも苦慮している生徒が多かった。それと同時に、聞き手の立場や状況を考えて表現内容を追加していくこと、言い換えると、他の文脈でも活かせるような汎用的な力を用いることは、生徒にとって難しい取り組みであったようだ。

7 おわりに

筆頭著者は令和5年度に地域公立中学校に異動になったが、地域公立中学校で「主体的・対話的で深い学び」を進めていくことに困難さを覚えている。一般的に地域公立中学校は1学期に学年の校外学習行事が組まれていることが多く、学校、学年、学級の組織づくりをしながら、その行事の準備もしていくので、教科担当が時間を合わせて協議する時間が取れない。そんな中で現場経験も浅い若手教員、非常勤の教員と学年を担当しなければならず、教員間の経験や指導観の差を埋めていかなければならない。教員が、何が主体的で、何が対話的で、深い学びとはどんなものか、イメージすら持てない中で授業に入っていかなければならない状況にある。研修もなかなか受けられない状況で授業を持つケースも見られ、「主体的・対話的で深い学び」をいかに追求しなが

ら授業を行い、生徒たちにどんな力をつけさせたいか考える余裕もなく、そのような視点もまだ持ち得ていない教員たちと、学年の生徒たちの英語学習を進めていかなければならないのが現状である。このようなケースは多くの学校で見られるものと思われる。そのような状況で、「主体的・対話的で深い学び」を進めていくには、下記の3つの要件が必要であると考えられる。

- ①教師が、自分自身の授業を省察し、生徒たちの学習が「主体的・対話的で深い学び」になっているかを確認する。
- ②時間を調整し、教師間で生徒たちに「着けさせたい力」を明確にし、端的でわかりやすい言葉で共有する。
- ③「着けさせたい力」をどのように実現させられるか考える中で、単元構想や授業計画の中に「おもしろさ」を見出すこと。

小澤（2018）は、「IBの理念を実際の教室で具現化するためには、カリキュラムを解釈し、具体化し、実施する個々の教師が重要な鍵を握っている。」とし、「IBの指導の手引き」に目標や評価の方法、目標達成までの段階や実践可能な方法が具体的に示されている理由として、「各国の教育事情、各教育機関の状況、児童生徒のありように応じてカリキュラムを効果的に遂行するために、教師にはかなりの自由と責任が与えられているから」としている。

「主体的・対話的で深い学び」を実現していくためには、指導・支援者である教師自身が、「主体的に」に単元を構想・計画し、そして教師間で「対話的に」にその活動の進捗状況を共有し、その情報共有の中に「深さ」を見出していくことが重要であると考えられる。

【参考文献】

- 学校法人 江西国際学園. (n.d.). 概念の理解. <https://enishi.ac.jp/JP/conceptual-understanding/>
- 堀哲夫. (2019). 新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性. 東洋館出版.
- 国際バカロレア機構. (2018). MYP: 原則から実践へ. <https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/myp/myp-from-principles-into-practice-2018-jp.pdf>
- 文部科学省. (2019a). 学習指導要領改訂の考え方. https://www.mext.go.jp/content/1421692_6.pdf
- 文部科学省. (2019b). 新学習指導要領の全面实施と学習評価の改善について. https://www.mext.go.jp/content/20202012-mxt_kyoiku01-100002605_1.pdf
- 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム. (2023). 国際バカロレアの推進に関する提言等. <https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/proposals/>
- 文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム. (n.d.). MYP(ミドル・イヤーズ・プログラム). <https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/myp/>
- 根岸雅史ほか. (2021). NEW CROWN 1 ENGLISH

SERIES. 三省堂.

- 小澤伊久美. (2018). 国際バカロレアの求める言語力. 母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 14, 1-14.
- 三森ゆりか. (2003). 外国語を身につけるための日本語レッスン. 白水社.
- 札幌開成中等教育学校. (2020). 言語習得 (英語) 1 年. <https://www23.sapporo-c.ed.jp/sapporo-kaisei/index.cfm/21,3000,c,html/3000/20200323-132246.pdf>

